



# 第6回 「海の講座」 (記録)

テーマ 「森と海のつながりと人間との関わり」

## 講座：「フジツボと文化」

- 1：日時 令和元年10月17日(木)10時～15時
- 2：集合場所、時間 AM (10時～12時) 芦屋市立市民センター (公民館 218号室)  
PM 兵庫県立海洋体育館 (芦屋マリンセンター) ・ ・ カヤック体験 ・ ・
- 3：参加者 向井先生ご夫妻・御旅屋氏・海の講座受講者・森と海の自然科員



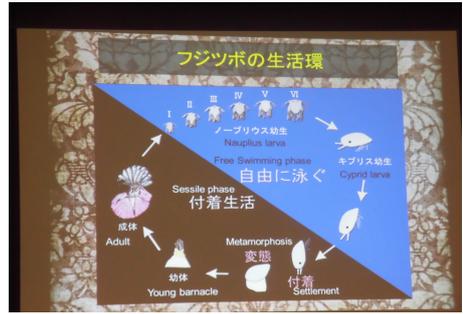
講師：富士うらら先生 (海洋生物研究家) (ペンネーム)  
岩波書店「フジツボ」魅惑の足まねき 著

・貝のように見えるフジツボ・・・実はエビやカニと同じ、甲殻類です。フジツボは起元前から、世界の錚々たる博物学者たちの興味をひいてきました。しかし、「動かぬ証拠」がおさえられ、甲殻類としての生活史が明らかになったのは19世紀の前半になってから。その後、チャールズ・ダーウインがフジツボ学の基礎を築きます。ダーウインは種の起源を著す前、8年間もフジツボ類の研究に没頭し、化石のフジツボから、現生のフジツボまで詳しく研究しました。地味なイメージとは違って、実際のフジツボは見た目も様々、大きさも数ミリから30センチ超まで。付く場所もウミガメの甲羅、イルカの歯の上、カイメンの中、ウミユリの茎、クラゲの上、はたまたウミヘビの尻尾の先にまで付着する多様な生物です。これまで、様々な方面で「フジツボ」という小さな生きものに関わった世界の偉人たちをご紹介します。

### ◆チャールズ・ダーウインとフジツボ学

浜辺でよく目にする生きもの、フジツボ。石灰質の殻があるので、貝のように見えますが、実はエビやカニと同じ、甲殻類です。しかし、石灰質の殻があることから、長い間、貝類とされてきました。甲殻類独特の幼生を経る生活環が明らかになったのはダーウインがビーグル号で世界をめぐる1年前、19世紀の前半になってからのことです。ダーウインといえば、「種の起源」で進化論を論じた英国を代表する自然科学者。一般にあまり知られていませんが、ダーウインは「種の起源種」を著す前、8年間もフジツボ類の研究に没頭し、化石のフジツボから、現生のフジツボまで詳しく研究しました。世界中のフジツボの比較した8年の研究結果は全巻あわせて1200ページを超す4冊の「フジツボ総説」にまとめています。このフジツボ研究はダーウインが進化論を考える上で大変重要であったようです。

フジツボ



フジツボの生活環



### ◆南方熊楠の「ウガ」

日本の偉人、南方熊楠。生物学（特に細菌、粘菌の研究）、民俗学、比較宗教学など関心は多岐にわたった博物学者。その南方熊楠が生涯大切にしていた「ウガ」という標本があります。沖でよくみられるセグロウミヘビですが、よく見ると尾の先にフサフサと図1のコスジエボシというフジツボ扇状についています。1924年（大正13年）6月、漁師が珍しいものがとれたと熊楠の元へもちこみ、熊楠は桶に海水をはって、尾の先でまだ生きていたフジツボを観察しました。フジツボの色、形、動き・・・その様子は持ち込まれた日の日記に詳しく記されています。熊楠は晩年、昭和天皇にご進講しています。ご進講の持ち時間が25分という限られたなか、一番初めに天覧（天皇に見せること）に供したのが「ウガ」でした。そのとき、熊楠は「紫色の光を發し、竜が珠を抱く姿で泳ぐウガ」と表現しています。

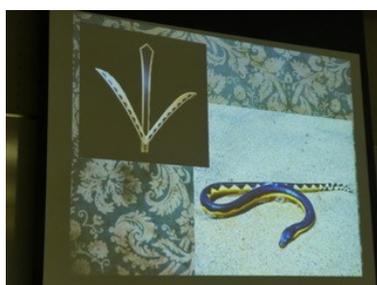
### ◆付着基盤であるセグロウミヘビ、出雲との関係

古代日本の神話には、蛇信仰が基盤にあることは知られています。神無月にあたる旧暦十月、（出雲では神在月）強い季節風が吹き荒れています。暖流から強い季節風で押し出され、セグロウミヘビが漂着していました。出雲で神在月に行われる神迎神事は稲佐の浜でセグロウミヘビを迎えることから始まります。八百万の神々を先導してつれてくる竜蛇神として、神事には欠かせない存在です。現在は護岸工事や潮の流れの変化などで打ち上がらなくなり、はく製で代用されます。江戸時代までは出雲大社の神職には、浜で流れ寄るセグロウミヘビをつかまえる役職があったそうです。

熊楠が十二支の動物について書いた「十二支考」にも『いずれも蛇を竜の幼稚なものとしたので、出雲佐多社（さだのやしろ）へ十月初卯日ごとに竜宮から童子を納（たてまつ）るというも、実は海蛇だ』とあり、竜の正体が海蛇だと明かしています。セグロウミヘビは、出雲大社や佐多神社、日御碕神社、美保神社など数社に奉納された記録があります。美保神社の船庫には「神光照海」と書かれた額がある。民族学者の谷川健一氏によれば、日本書記に「神（あや）しき光海（うな）に照らして」という一説があり、宮司に質問してみると、予想通り「海を照らして依来る」のはセグロウミヘビのことだったといえます。というのも、漁師の間では夜間にはセグロウミヘビが泳ぐ姿が、金色の火の玉に見えという伝承がありました。



竜が玉を抱く姿で泳ぐ『ウガ』



ウミヘビ



海蛇の尾に、帯紫肉紅色で介殻なきエボシ貝